

宿場町ひらかた

結成30周年記念特別号
〈平成28年3月20日発行〉



宿場町枚方を考える会

結成30周年記念 堀家会長あいさつ

本会は平成27年(2015年)3月1日をもって、創立30周年を迎えました。昭和60年(1985年)、心ある市民、地元の方々、学者の皆さんが相より、歴史ある旧枚方宿の町並みを残し、後世に伝えるための活動を行うために結成されて以降、先人の努力におり着実に取り組みを進めてきました。

この結果、市行政や地元の理解もあり、町並み整備要綱により景観保全が進められ、また旧枚方宿の歴史を資料として伝える市立枚方宿鍵屋資料館の整備や、地元の皆さんによるまちづくり事業も取り組まれてきました。

平成22年度の本会総会では、旧枚方宿を永久に後世へ伝えていくため、会活動の活性化をめざし、会則の改正を行いました。旧枚方宿だけにこだわらず、広く枚方の歴史を知ることにより、旧枚方宿の再発見を行えることを目指したのです。そして史跡見学や市内や近郊を散策する会など歴史を愛する多くの方の参加を促し、会員のすそ野を広げる親しみやすい事業に取り組んできました。現在では再び百名を超える会員を擁することとなりました。(平成28年3月1日現在114人)

現在の課題は会活動を進めていく人材の育成です。会員や役員の高齢化が進んでおり、今後の活動が危ぶまれる状況です。若い世代が枚方の歩んできた歴史を学び、後世にその財産を伝えていくことが大切です。そのためにも若い世代の会活動への参加を呼びかけていく必要があります。

30周年を一区切りとして、斬新な発想により新たなる「宿場町枚方を考える会」を築いていきたいと考えます。そのためにも多くの世代の皆さんのご参加をお願い申し上げます。



会長 堀家 啓男

平成28年3月20日

結成30周年記念式典

〈平成27年11月15日／メセナひらかた〉

堀家会長の挨拶



式次第

一、開会
一、本会挨拶
一、来賓祝辞

枝方市 市長 伏見 隆氏
枝方文化観光協会 理事長 大西 信駿氏

会長 堀家 啓男

創立三十周年記念式典
宿場町枝方を考える会

会場



受付



資料展示



役員として長年携わってこられた方々の思い出

本会創立後、早い時期に入会し、役員に就任、長年にわたり本会を支えてきていただいた4人の方々にこれまでの思い出などについて手記をいただき、またお話を伺いましたので、ご紹介いたします。多大のご貢献をいただきましたことにつきまして厚く感謝申し上げます。なお、この他にも多くの役員にご活躍ご協力をいただきましたことにつきまして併せて御礼申し上げます。

入会までの思い出

北田節子さん（以下、北田さん）

「幼少の頃、禁野火薬庫爆発にあい、爆弾が田んぼに落ちるのを見ながら津田方面に逃げました。火事のため住んでいた村は全焼しました。避難先から村の方向の空をみると、夜なのに夕焼けのように赤かったのを鮮明に覚えています。小学生のときに終戦となり、2学期に登校した時、以前厳しかった先生が優しく急変、思えば軍国主義の時代から、民主主義への時代への転換だったのですね」。

（参考）

日清戦争の頃、軍備拡張が起こり、その一環として陸軍は淀川の舟運を利用できる渚、禁野の丘陵地に、明治29年（1896）11月、禁野火薬庫を完成させました。同火薬庫は明治42年（1909）8月に爆発を起こし、周辺に被害を与えました。火薬庫は次第に拡充され昭和8年（1933）には13万坪の大弾薬庫となりました。片町線津田駅から引き込み線が敷かれ、鉄道による運搬が行われました。この火薬庫が昭和14年（1939）3月1日、大爆発したのです。死者94人、周辺の禁野、中宮の大部分、天之川の半数が焼失しました。

千葉榮子さん（以下、千葉さん）

「学徒動員中の昭和20年（1945）6月1日、十三の淀川堤防で米艦載機の機銃掃射を受け、伏せの姿勢から殺伐たるなか、立ち上がることができ、命拾いし今があります。勉強がしたくてもできない戦時の厳しいときを送ったわたしたちの世代が最も学力が劣っているとの世間の風評が悔しいことです。戦後の人手不足の時代、戦時中の命拾いをした恩返しに、公務員にとの父の勧めもあってまさかの市役所に就職し、事務職として40年勤務しました」。

安廣義見さん（以下、安廣さん）

「岡山県の山村にて6歳までランプ生活、9歳まで大阪市内、そして10歳から枚方在住となりました。昭和20年（1945）4月、旧制中学3年のとき勤労働員のため東京第2陸軍造兵廠香里製造所で毎日、火薬と弾丸を扱う仕事をしていました。空襲警報が発令されると山中の防空壕に逃げ込んで避難します。6月頃だったと思います。真っ昼間B29爆撃機の空襲があった際、いつもの通り防空壕に入り、大阪の方を見ると真っ黒な雲に覆われて、その中を炎の滝が流れるように焼夷弾の雨が降っていました。恐ろしい光景でした。またあるときには米艦載機に襲撃され、その米兵と眼があったように感じたこともありました」。

(参考)

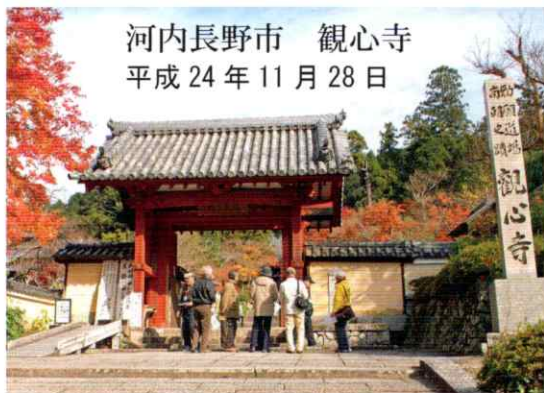
香里製造所は昭和14年(1939)に茄子作、中振の丘陵地に開設され、弾丸に火薬を詰める作業が行われました。片町線星田駅から引き込み線が敷かれ、火薬や弾丸が運ばれました。この跡地が現在の広大な香里団地の住宅地です。戦時中や戦後の生活を語れる人は次第に減少しています。30周年の記念誌に本会会員の方からこのような貴重な経験を話していただけることは本当にありがたいことです。

入会してからの思い出など

北田さん

「平成5年(1993)、当時の神野忠雄会長さんの勧めで入会しました。翌年から会計となり、当初千葉さんに教わりながら、約10年担当しました。その間、『枚方宿の今昔』の発刊、販売等会計として大変複雑な期間がありました。役員も本の販売に携わりましたが、物を買ってもらうことの難しさや思わぬ方が買ってくださったときの嬉しかったことなどよい経験になりました」。

もともと文化財に興味があり父も郷土史(百済寺礎石)に関わっていましたので入会して歴史的な所へのバス見学会や講演会に参加できて、いままで知らなかったことがわかり良かったです」。



バス見学会



「講演会の受付をしていたとき、『長年住んでいるが、歴史的なことを聞く機会が無かった』と言われたことがありました。公的機関でやっていないことを当会が地道に郷土史のことや、歴史的な人物と枚方との関わりなど知ってもらう活動を今後も続けることは大切だと思います」。

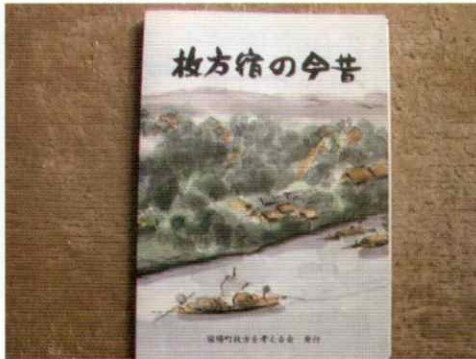


講演会

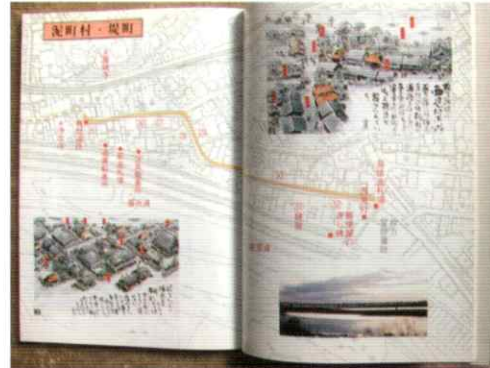


(参考)

「枚方宿の今昔」平成9年（1997）3月発行 福谷一男会長当時です。



「枚方宿の今昔（表紙）」



「枚方宿の今昔（本文）」

千葉さん

「平成3年（1991）市役所を退職し、枚方の歴史を知りたいと思っていたころ和泉さんから進められ入会しました。翌4年から会計を担当しました」。

「平成4年（1992）にピオルネ枚方で開催された会主催の『枚方宿と町衆』展は大賑わいで、入場者3000人を記録しました。松本さんと和泉さんのお骨折りで会場に設けられたお茶席には265人もお越しくださり、ご祝儀も128000円いただいたと記憶しています。珍しい展示品もあり、当時の中島事務局長さんと、故初田副会長さんのご苦勞が特に印象に残ります」「展示会の精算書の作成、会員数最高185名、バス見学会の参加者も50名を超え、総会にも大勢の参加があつて今思えば嬉しい悲鳴の連続でした」「疎開先の津田町と菊人形の枚方しか知らなかったのに、宿場町枚方に興味津々となりいろいろな行事、見学会など事故無く皆様とご一緒できたことが何よりの喜びでした」「これから古文書の勉強をすこしやってみたくて、心の健康のためにも新しい催しにもできるだけ参加させていただきたいと思っています」。

展示会

「京街道と枚方」展

昭和63年（1988）8月23日～28日 枚方三越



当時のポスター

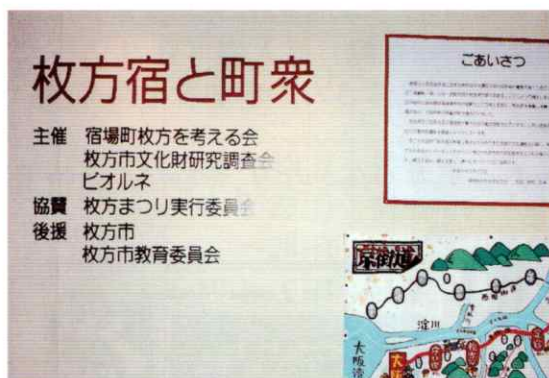
拡大



「枚方宿と町衆」展

平成 4 年（1992）8 月 20 日～24 日

ビオルネ枚方



和泉さん

「市役所職中の昭和 60 年（1985）、初代会長の大塚日出男さんに勧められて入会しました。大塚さんはもと大阪府庁に勤めておられ広報を担当されていて、地元枚方のことについてもよく取材され、深い見識をお持ちの方でした」「大塚さんと塚田憲一さん（画家）が河内西国三拾三番のことを調べられ、冊子にまとめられ会から発刊となりました。大阪北浜の商家に養子で入った津田元次郎さんという方が河内三拾三番の各寺に擲づくりの立派な御詠歌の額を寄贈されていたということでした。

大塚さんが調べられたところ、この方は神野家の出身ではないかということで、神野忠雄さんにも伝えられました。このことを知って驚かれた神野さんはこれを所以に、会に入会され、その後第二代会長に就任されることになりました。大塚さんは大変積極的で企画力のある方でしたので会の結成が実現したと思いますし、また会の活動が充実し、飛躍したのは第二代の神野会長の実行力があつたことからと思います。会結成の早い時期から行事運営の中心的な活動にも加わらせていただき、また記録写真の撮影を担当したこともありました。結成 30 周年を迎えられたことは感無量です。」

「展示会の期間中 6 日間、会を和やかにするためお茶会をもちましたが、夏の暑いとき穂谷の酒造元から清水を提供してもらい冷茶をもって接待し、好評を得たこともありました。」

「本会が若い人たちの入会によりますます発展することを期待しています。」

（参考）

昭和 61 年（1986） 小冊子「河内西国三拾三所観世音めぐり」発行
文 大塚日出男 絵 塚田憲一



河内西国三拾三所観世音めぐり(表紙)

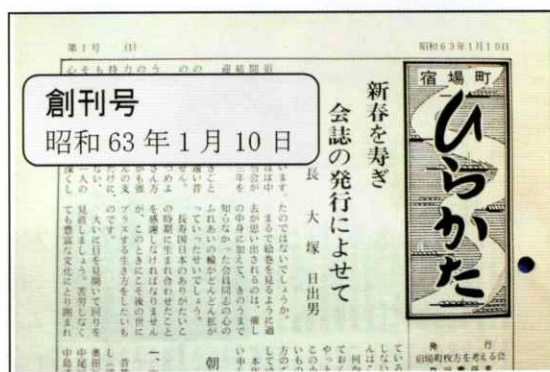


河内西国三拾三所観世音めぐり(本文)

安廣さん

「平成4年（1992）に神野さんに勧められて入会しました。平成13年（2001）に副会長となり、現在は相談役をしています。「平成元年（1989）に北河内府民センターと共催で『京街道わらじ旅』を行った際、旅人姿（男2人、女2人）、わらじ履きで枚方宿から守口の佐太天満宮までたくさんの参加者を得て歩いたことを思い出します」。

「会誌編集の前任二人の方が相次いでやめられ編集者不在となり、やむなく一時期、編集を担当しましたが全く経験がなく苦労しました」。



機関誌



事務局としての思い

30年の年月は長いようで短い期間であったと言われる方がありますが、この間多くの役員や会員のご協力を得て数々の行事を企画し開催することができました。皆さんの現在までの推し量れないご協力、ご支援に厚く感謝と敬意を表するものです。ありがとうございます。

今日、多くの市民の皆さんはより豊かな自然とのふれあいや、文化、伝統・歴史との関わりを求めておられます。行政においてもこれら市民の需要に応える環境づくりを進めておられますが、さらなる取り組みを期待したいところです。本会では機会ある度に、行政に対し具体的文化、観光、歴史にかんする提案を行ってききましたが、予算がない、手が回らない、今後、検討するといったことで、なかなか実現にはいたっていません。

市民団体である本会や、地域の皆さんとともに、行政とが一体となって取り組むことが大切だと思います。歴史文化の継承には、市民の皆さんに如何に知っていただくか必要であることは言うまでもありません。ハード面では、本市にはない歴史博物館の整備や資料を展示する歴史民俗資料館、史跡の案内碑の整備など、ソフト面では市史を担当する正規の研究職員の確保、研究発表の場の設定、専門家による講演会、史跡見学会などが望まれます。

また、市民の皆さんが自宅に保存されている資料が相当数あると思われます。廃棄、散逸れされることの無いよう財団等による文庫の整備も待たれるところです。

本会では今後とも歴史文化継承の一端を担っていると常に認識しながら活動してまいりたいと考えています。行政にとって年月とお金のかかる取り組みもあるでしょうが、対応の遅れが後年、後悔する結果を生むことを肝に銘じ、前向きに取り組むことを切に願う次第です。そのため本会としてもソフト面での尽力を惜しまず協力しながら活動していく所存です。

宿場町枚方を考える会 事務局長 上野幸夫

宿場町枚方を考える会 結成30周年記念事業

枚方の歴史入門講座概要



回数	開催日	講師	テーマ	受講者
第1回	平成27年6月16日	堀家	記紀に見る茨田堤築造など	103人
第2回	平成27年7月21日	榊原	枚方での行基の活躍	102人
第3回	平成27年8月18日	堀家	桓武天皇と郊祀壇	95人
第4回	平成27年9月29日	松中	蓮如上人と出口光善寺	84人
第5回	平成27年10月20日	上谷	枚方宿の設置と三十石船	88人

記紀に見る茨田堤築造、継体大王の樟葉宮即位

第1回 枚方の歴史入門講座
講師 堀家 啓男

開催日 平成27年6月16日
場所 枚方市市民会館



1. はじめに

(1) 先史時代

◎旧石器時代

楠葉東 藤阪宮山 船橋 津田三ツ池

1万年前～ 海水面－40mまで下がり、陸地が広がります。

◎縄文早期

穂谷 (神宮寺)

秋の木の実(栗など)の採取、水辺での魚、貝とり。移動生活。

7千年前から気候の温暖化で海面がどんどん上がりはじめます。

6千年前には 現在の海水面より2m高くなり、「縄文海進」となります。

古河内平野に海水が流れ込み、上町台地は北に延びる半島状に。河内湾からやがて河内潟へ向かい、淡水化します。現在の枚方地域周辺に広がる潟、つまり平潟(ひらかた)が出現し、その後背地に潟を取り巻く野(潟の)が茂っていました。「枚方」と「交野ヶ原」の地名として残るほど人々の記憶になったのだと思います。

5千年前～ 海水面現在の水準に下がります。

◎縄文中期

津田三ツ池(星田旭 森ノ宮 讃良川)
九頭神

4千年前～

◎縄文後期

生駒山地西麓

3千年前～2千年前

◎縄文晩期

交北城ノ山 岡東

河内湾はすっかり潟湖となり、沖積がすすみます。寝屋川では靱跡痕のある土器が見つかります。枚方では、縄文人の定住跡はまだ見つかっていません。

(2) 弥生時代

大陸(朝鮮半島)から北部九州に稲作が伝わり、村ができ、人が増えると、田の拡大が必要となり、村と村の戦いが始まります。防御のために村は高地へ移

転、環濠を設け、貧富の差ができ、王が生まれ、時代の流れは急速です。
紀元前1千年～同800年

◎弥生早期 農耕への転換
(若江北(東大阪) 山賀(同) 安満(高槻))

紀元前800年～同400年

◎弥生前期 招提中町 淀川河床 岡東

紀元前400年～同50年

◎弥生中期 交北城ノ山 星丘西
穂谷川、天野川水系に村が生まれる。
田口山 津田城

枚方でもムラの防御に適した高地性集落があらわれます。星丘西では方形周溝墓がつくられ、シャーマンの線刻土器や武器類が発掘されます。枚方ではまだ銅鐸は見られていません。

紀元前50年～後180年

藤田山 茄子作 鷹塚山 田口山(交北城の山から移転) 鷹塚山では特異な土器

後180年～240年

◎弥生終末期 天野川水系に弥生墳丘墓があらわれます。

(3) 古墳時代

大きな墓(古墳)が、豪族により造られます。(3世紀以降、7世紀前葉)

3世紀中葉～4世紀(◎前期) 天野川流域に万年寺山 禁野車塚(箸墓と相似形だそうです) 穂谷川流域に牧野車塚

5世紀 (◎中期) 大型前方後円墳はなくなる。姫塚 楠葉など
集落では茄子作遺跡や交北城ノ山遺跡で韓式系土器

6～7世紀(◎後期) 白雉塚(多彩な副葬品)

2. 記紀にある枚方の記述(参照「郷土枚方の歴史」市教育委員会)

(1) 楠葉の地名由来

○古事記(崇神天皇の段) 「天皇の討伐軍は反乱軍を「久須婆」の渡しに追い詰めた。恐怖におののく兵士たちは尿をもらし、褌(はかま 袴)を汚した。そのため「屎褌(くそばかま)」と名付けられ、現在は「久須婆」という」としています

◎日本書紀(崇神天皇10年) 『其の卒怖ち走げて、屎、褌より漏——褌より屎ちし処を屎褌と曰ふ』、現在は訛って「樟葉」になった」としています。

(2) 茨田堤(まむたのつつみ) 築造

○古事記(仁徳天皇の段) 『秦人(はたひと)を役(えだ)ちて茨田堤及茨田三宅を作り、又丸邇(わに)池、依網(よさみ)池を作り、又難波の堀江を掘りて海に通はし』

◎日本書紀(仁徳天皇11年) 「淀川の洪水を防ぐため茨田堤を築く。難所が2か所あった。天皇の夢に神が現れ、武蔵国強頸(こわくび)と河内国の茨田連衫子(まむたのむらじころものこ)のふたりをそれぞれ人柱として川の神に捧げると工事がうまくいくと告げた。強頸は川に沈められ難所1か所は完成した。しかし、衫子は2個の瓢箪を川に流して「川の神よ、わたしが要るなら、この瓢箪を沈めよ。沈まなかったら偽りの神である。人柱にはならない。」と叫んだ。

瓢箪は沈まず、杉子は、自らの才能で死なずにすみ、もう1か所の工事も成功した。難所を絶間（たえま）と呼ぶ。」としています。

(3) 継体天皇、樟葉宮で即位

○古事記（武烈天皇の段）『（武烈）天皇既に崩りまして、日續知らすべき王無かりき。故、品太（応神）天皇の五世の孫、袁本杼命（おおどのみこと）を近淡海国より上り坐さしめて、手白髪命に合せて、天の下を授け奉りき。』『（継体天皇の段）品太王の五世の孫、袁本杼命、伊波禮の玉穂宮に坐しまして、天の下治らしめしき。』

樟葉宮の記述はありません。

◎日本書紀（継体天皇元年）「大伴金村の尽力で、元年（507）、『甲申に天皇樟葉宮に行至りたまふ。二月、一略一是の日に即天皇位（あまつひつぎしろしめす）』皇后手白香皇女を立てた。即位までに大伴金村や河内馬飼首荒籠（かわちのうまかいのおびとあらこ）の尽力があった。継体天皇は河内国茨田郡の樟葉宮で即位し、4年滞在、筒城宮、弟国宮へ移り20年9月、磐余玉穂宮に入った。男大亦王（継体天皇）は越前、九頭竜川流域の高向（丸岡町）で育てられたとする。玉穂宮にて崩御。」としています

(4) 「ひらかた」の地名の初出

○古事記 石井（磐井の乱）の記述はありますが、毛野（けな）の記述はありません。

◎日本書紀（継体天皇24年）「天皇は任那における勢力回復のため21年（527）近江臣毛野に朝鮮半島への渡海を命じた。九州で磐井の乱が生じ、毛野は成果をあげられず24年（530）帰還、対馬で病死した。毛野の遺体は瀬戸内海を経て淀川を船で運ばれた。遺体を引き取りに来た妻は、子が吹く葬送の笛を聞き「ひらかた（比擺笳駄）」で亡き夫に対面し、嘆き悲しんで、詠んだ挽歌ひらかたゆ笛吹き上る近江のや毛野の稚子（わくご）い笛吹き上ると詠った。」「ひらかた」の地名の初出です。

3. 継体大王、樟葉宮で即位へ

○5世紀前後にやってきた新羅系の渡来人が、朝権の進展により、秦氏として取り込まれ、全国各地に配置されます。先進的な土木技術を有した秦氏の一部は、河内地方にもおかれ、河内湖の水を海に放出する堀江の整備や、淀川の氾濫を防ぐ茨田堤の築堤、田畑の開墾にあたりました。5世紀後半といわれます。寝屋川市には秦、太秦という渡来系を思わせる地名が残っています。

○茨田郡を本拠とした茨田連は、秦氏である茨田勝（すぐり）らの土木技術を駆使して堤の整備や開墾をすすめました。杉子の話は茨田連が朝廷へ誇る氏族としての歴史を伝えるもので、武蔵の強頸は渡来人の技術力をもたなかった氏族ということです。

○播磨風土記（714）にあらわれる揖保郡の枚方里が、河内国茨田郡の枚方里の渡来人（漢人と記される）が移されたからという地名伝説は、「枚方」という漢字の初出です。揖保郡付近を有した厩戸皇子は、渡来系秦氏と深いつながりがあり、皇子の力で土木技術のある茨田郡の渡来系の人々が移住させられたと思います。

○堀江の整備、難波津、河川の整備により、淀川を利用した交通ルートが整い、朝

鮮半島からの馬の搬入による河内地方での放牧が展開されました。四條畷などで馬の埋葬例が見つかっています。河内馬飼首荒籠は渡来系と思われますが、渡来系の人々を傘下に置いて、河内を本拠に放牧や、馬、水運を活用し交易に携わりました。また荒籠は近江毛野氏の従者として対外交通の場にも活動の場を広げました。近江、越前を地盤とした男大亦王、のちの継体大王が荒籠に情報を求め、内外の状況を見極め、馬という軍事的な実力を得て、淀川河川交通を抑えるネットワークの地にあった樟葉宮で即位（507）を受け入れる判断をしたと考えます。

講座関連史跡見学会訪問地

安養寺（南楠葉2丁目）



鏡伝池（楠葉丘2丁目）



久修園院（楠葉中之芝2丁目）

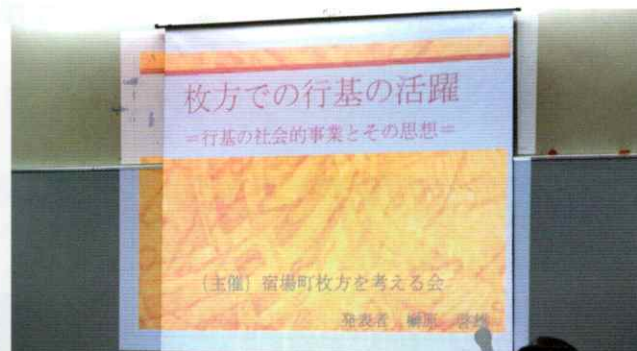
神亀2年（725年）に行基が創建したと伝えられている真言律宗のお寺。



枚方での行基の活躍

第2回 枚方の歴史入門講座
講師 榊原 啓雄

日時 平成27年7月21日
場所 枚方市市民会館



◇行基（668年～749年）

河内国大鳥郡に生まれる。両親は百済系の渡来氏族の出身。行基が生きた時代は政争と動乱、飢饉と災厄など混迷の時代。15歳で出家。飛鳥寺（別名、法興寺・元興寺、超エリート寺院）の道昭を師として南都六宗の法相宗を学ぶ。師亡き後、寺を出て生家に戻る。寺の外は悲惨なため、民衆の苦難を救う道を踏み出す。

「院」を拠点に地域活性の総合事業（橋・寺院・池・宿泊施設の布施屋・港）を行う。外国の新しい知識を持った僧が、生活に苦しむ農民や低い身分の人々の暮らしを助け、彼らが生活しやすい環境を作るための土木工事を行う。

行基が行った土木事業 →橋6、池15、溝7、樋3、港2、堀4、布施屋（宿泊施設と救護施設）9（楠葉にも布施屋をつくる）、僧院や尼院49。

49院のうち枚方には久修園院（交野郡楠葉）・枚方院（茨田郡伊香）・薦田尼院（茨田郡伊香）・報恩院（交野郡楠葉）の4院を建立。久修園院以外の3寺は現在所在不明。

○久修園院（別称河内山崎院・天王山木津寺ともいわれる。）

所在地 枚方市中之芝2丁目46番地。（当時は河内国交野郡一条内）
奈良時代の725年（神亀2年）僧行基が橋本と淀川対岸の山崎との間に山崎橋を架橋すると同時に、この橋を維持管理し、旅人の便宜をはかるために建立。現在は、真言律宗別格本山のお寺。本山は奈良西大寺。

*行基年譜という文書には「739年（天平11年）久修園院で仏法修行の合宿で164人が得度」と記録されている。このことから行基開基の寺と位置付けられてはいるが、残念なことに度々の火災で行基に関わる歴史的なものが残されていない。

○行基の建てた寺院 →民衆寺院。立派な瓦葺ではなく、民衆に仏教の教えを広めるための建物。そのため寺ではなく院と呼ばれたようである。

○行基の行動 →院と橋の工事は同時。工事に先立ち楠葉の地で地元民への資材・労力を求める説教と托鉢行を行い、行基集団への呼びかけをした。院は祈りの場

であり、行基集団の寄宿と相談の場でもあった。

- 717年 →朝廷より「小僧行基」と名指しで布教活動を禁圧される。
- 731年 →行基に従う男61歳以上女55歳以上は入道を許すという詔がでる。
- 737年 →天然痘が大流行。行基菩薩と呼ばれ、尊敬される。
- 743年 →朝廷が大仏づくりを決定。行基の人気が必要。
- 745年 →行基が大僧正（僧の最高位）となる。
- 749年 →病死。

○**行基の思想と実践** →奈良時代の仏教は、朝廷のために存在。行基は 仏教が説く「慈悲」を重視。重税にあえぐ庶民の救済活動を行う。利他行の実践。民衆救済の事業。

○**行基の福田思想** →三つの福田を耕す。（袈裟は、別名“福田衣”という）人々の心を耕し、幸福を育てる田んぼ。（お袈裟は田んぼの形）

- 行基の三つの福田を耕す実践 →①神仏を敬う心を耕す（敬田）
②先祖への法恩感謝の心を育てる（恩田）
③慈悲の心を養う（悲田）

仏教思想の原点 →民衆の中に足を踏み入れ、苦楽を共にして民衆の福祉を願うのは菩薩としての仏教者の真の姿との思いで行動。

◇久修園院と山崎橋

奈良時代、久修園院あたりは、交通の要衝地。平城京から続く官道（旧山陽道・古代山陽道）がこの付近を通る。山崎橋を渡って、山陰や九州大宰府へと通じる。この旧山陽道（古代山陽道）は、現代の高速道路のルートづくりとよく似ているといわれる。発掘調査によると約30キロメートルの直線道路も存在したとのこと。古墳を破壊してでも直線にこだわって古代道路を造成したという。

八幡市の「橋本」という地名は、“山崎橋のたもとに集落”ができたところから名付けられた。山崎橋は行基の師である道昭（653年～700年 河内国に生まれる。渡来系豪族の出身。遣唐使の留学僧。玄奘三蔵に師事。法相教学を学ぶ）が橋を建設。その橋が洪水で壊れたままであったのを行基が再架橋。道昭など当時の留学僧は、単に仏教学を修めるだけではなく天文学・薬学・土木建築学・造船学など総合的な学問を修めて帰国。留学僧は僧の立場とともに漢方医や天文学者でもあり、また土木建築技術者でもあった。行基も師匠の道昭や渡来系の親族関係者から土木建築学を学ぶことができた。山崎橋は、11世紀中頃、国家による維持は困難になり、水運に移行。

◇古代の駅と「楠葉駅」

711年（和同4年）の「続日本紀」に河内国交野郡楠葉に「楠葉駅」などを新設とある。近くでは東に綴喜郡「山本駅」（京田辺市三山木近辺）西に摂津国「大原野駅」（楠公父子別れの駅“桜井の駅”大阪府島本町）の表記もある。

「駅家」（うまや）とは古代の幹線道路に設置された施設。約16km（古代の単位で30里）ごとに駅馬を備え、人や馬の継立、宿舎、食糧の供給をしていた。

「楠葉駅」は、現在の久修園寺の近くと推測されるが、船橋、養父あたりとの説

もある。

長岡京や平安の時代には山崎 → 橋本 → 「楠葉駅」を経て大阪・南河内方面へ向かう南海道が通じ、楠葉あたりは交通の要衝地。

古代の幹線道路は直線的で幅広い（12～16メートル。側溝も造る）道路。「楠葉駅」でも駅馬を用意し、宿舎・食糧を供給する施設。[布施屋]も整備。

税を都に運ぶ人、兵役や労役につく人、情報を伝達する人たちが行き来したが、途中で病気になったり、野たれ死になる人も多かった。行基はこのような人を救おうとした。

○旧山陽道が奈良から迂回して楠葉まで北上した理由 → 下流の淀川両岸には氾濫原が広がっていたこと。もう一つは楠葉は、男山と対岸の天王山が迫っており、地盤が安定していた。淀川を確実に渡ることができた場所である。

◇行基に関わるアラカルト

- ・今日でも行基を讃える街 → 伊丹市昆陽寺（市民から“行基さんのお寺”と呼ばれ、毎年4月には“行基まつり”を開催。
- ・地名 → 伊丹市行基町
- ・郵便局名 → 大阪市東住吉区行基大橋郵便局・伊丹市行基郵便局
- ・橋の名前 → 大阪市東住吉区“行基大橋”
- ・河内七墓（東大阪市の共同墓地。各墓地には、行基像や石碑がある）→ 行基37歳の時薬師寺を飛び出し、民衆に仏教の布教を始めた当時、中河内一帯は、天候不順による飢餓と疫病の蔓延で多数の死者が出たが、死体は、供養されずに野晒にされていた。これを憂いた行基は、民衆に呼びかけ、遺棄・放置された死体を共同で集め茶毘に付し、供養したのが起源。現在でも盆の8月14日の七つの墓をお参りすると極楽往生できるという言い伝えがあり、中河内地域では、盆の月にお年寄りが七墓参りをして先祖供養する風習がある。
- ・庶民仏教の行基信仰の拡大 → “鎮護国家”という国のための仏教に対し民衆側に立つ。民間信仰を拓めていったのは、下級僧侶の聖（ひじり）たち。民間信仰的仏教は、聖の仏教ともいえる。行基は、聖の先駆者として位置づけられる。庶民仏教は、聖や山伏や雲水たちが離島もいとわず歩いて入っていった。仏教は、歩く「宗教家」によって庶民のものになった。
- ・仏教ではない仏教 → 日本仏教は、教団としては多くの宗派に分かれて発展してきたが、その根底には宗派に関わりのない民間信仰がよこたわっている。
- ・行基集団が急激に膨張拡大した理由の一つ → 奈良時代の初めに火葬に代わったため、葬送に関与する宗教者が行基集団に流れてきた。三昧聖（隠坊聖）は、火葬の術を行基から与えられたという伝承がある。
- ・根本誠二筑波大教授の話 → 「大多数の仏教界において、行基はすでに信仰上、宗派史上の人物として語られることはない。その要因として考えられるのは、明治初年の仏教近代化政策・・・各仏教集団において推進された教義や宗学の近代化のもとに・・・伝承や縁起に見る行基は、宗学史的にも教学史的にも重要な僧侶ではないとされた。」
- ・古代三大橋 → 山崎橋・宇治橋・瀬田大橋

夏季のため講座関連史跡見学会はありません

交野ヶ原、桓武天皇と郊祀壇

第3回 枚方の歴史入門講座
講師 堀家 啓男

日時 平成27年8月18日
場所 枚方市市民会館



京都盆地の南を経て、大阪湾に流れる淀川、左岸の中流域に沿って、男山丘陵との間の微高地に広がる『北は楠葉、船橋から招提、阪にかけて、西は小倉、渚、禁野から、東は田口にいたり、片銚、甲斐田、中宮などを中心に、南は村野から津田、交野市の倉治、郡津、私部にいたる旧交野郡の大部分の地』(枚方市史第2巻)が、かつての遊獵地であった交野ヶ原とされます。交野ヶ原が天皇や貴族の狩獵地、遊樂の地とされたのは、『京に近いこと、水辺の丘陵が起伏するところで風光明媚であること、雉・鴨や鹿・猪が多かったためである。』(同) この交野ヶ原が、歴史上もっとも輝いたのが、桓武天皇(以下 桓武)治世を含む8世紀後半から、9世紀の初めのころでした。桓武の父、光仁天皇(以下 光仁)が宝亀元年(770)即位した翌年の初行幸で、交野ヶ原を経て、難波宮へ向かった時が最初です。

1. 百済王敬福(きょうふく)大仏建立のため黄金900両を献上

聖武天皇(以下 聖武)が東大寺大仏の造立をすすめ、その仕上げの段階で鍍金不足となったとき、タイミング抜群、天平21年(749)4月、陸奥守であった百済王氏4代目の敬福から小田郡涌谷(わくや)村(現在の宮城県内)において黄金発掘との報が駅馬によってもたらされました。天皇はこの朗報をいたくご嘉祥、直ちに改元、天平感宝元年とし、敬福に従三位を授け、その年すぐ、孝謙天皇(以下、孝謙)に譲位しました。孝謙は天平勝宝に改元、翌2年(750)、敬福を河内守の兼務としました。ここから渡来貴族百済王氏一族の約150年の繁栄が始まります。大仏開眼の供養は天平勝宝4年(752)のことです。

百済王氏は百済国義慈王の子で、舒明3年(631)に渡来してきた禅広(ぜんこう)王を初代とします。禅広は百済滅亡後も帰国せず、持統天皇から百済王(こにし)の号を賜り、昌成、郎虞(ろうく)と続き、郎虞の3男が敬福です。日本書紀に天智天皇(以下 天智)3年(664)、百済王氏を難波に居(はべ)らしめたとあり、その地は当時の摂津国百済郡のこととされます。この地は都と難波を結ぶ要衝で、今の、生野区や平野区のあたり、大和川下流の湿地帯で、渡来系の人々が早くから、水害対策や耕地開拓のため住み始めていました。百済王氏一族も技術力を活かし耕地整備をしながらこの地を本拠にし、難波の百済寺の創建も行いまし

た。考古学的な成果が明らかになりつつあります。

一族は他民族の王族として律令体制の中華思想のもとで尊重され、天皇の近くにあり、難波宮から聖武の行幸を得て百濟樂を奏したこともあります。加えて一族の多くは、朝鮮半島で培ってきた軍事能力をかわれ、王権の課題であった蝦夷攻略のため東北に派遣されました。なかでも敬福は、早くから国府多賀城に赴任し、天平10年(738)頃には陸奥介として、大いに活躍し、天平15年(743)、実績を認められ国司である陸奥守に任命され、その地で、さらなる一族栄達への道を開く黄金発掘(749)と相なります。

敬福は一躍、参議として廟堂に上り、ついに孝謙のとき、難波から河内国交野郡への本貫地の移転が認められます。湿地の百濟郡から、渡来人が多く風光明媚かつ台地である交野郡へという敬福への特別なはからいでした。栄光につつまれた敬福は、財力を活かし、中宮の地に本拠となる区画の整った街づくりを行い、異国情緒あふれる建物群を整備したと思われまふ。世に出られぬ頃天智の孫、白壁王(のちの光仁)と、その子、百濟王氏系の和(やまと)氏の高野新笠を母とする若き山部王(やまべおう のちの桓武)がその無聊をなぐさめるため、渡来の血になじみある敬福の邸をおとずれていたことは想像できます。若き山部王と敬福の娘、明信との間に愛がめばえていたという説もあります。敬福は、王権の愛顧にこたえ、きらびやかな伽藍の氏寺、百濟寺の創建に着手します。敬福は完成を待たず、重祚した称徳の天平神護2年(766)死去しました。

白壁王が光仁として即位(770)した頃には百濟寺は完成していました。光仁が最初の行幸で交野に向かった理由は謎とされますが、即位にあたり資金的援助を受けた百濟王氏へのお礼と即位の祝宴の招待をうけるためであったと想像します。

2. 桓武天皇の即位、交野ヶ原で天神を祀る

天応元年(781)、光仁の病気による譲位を受け桓武が即位します。光仁の皇太子は皇后井上(いがみ)内親王(聖武の娘)との間にできた他戸(おさべ)親王でしたが、皇后井上が天皇である夫君光仁の死を呪詛したとの疑惑が生じ、それに同調した他戸親王とともに廃されます。すぐに山部王が皇太子となり、即位した桓武は、天武系を退け、天智の孫である父光仁の皇統を強く意識(天智系)します。まず桓武は自らの新しい皇統の拠点として、天武系の色濃い平城京を廃し、新しい宮都づくりを目指します。それが長岡遷都(784)であり、その頓挫に続く平安遷都(794)の断行という大事業です。平安京はここに千年の都となるのです。

桓武は延暦3年(784)5月、決然、いまだ未完成の長岡宮へ移ります。この遷都の前段階で桓武は即位後初めての交野行幸を遊獵として、延暦2年(783)に行いますが、これも恐らく光仁に倣い百濟王氏一族による即位を祝う宴にまねかれたものではないでしょうか。桓武は智謀の人でした。遊獵のさなか交野ヶ原の東端にそびえる交野山(こうのさん 古代の磐座のある神(こう)の山か)を遠望し、この山を南(そういえば長岡京のほぼ真南)におき神の山とする道教的思想のもと長岡京の造都を構想しました。(「交野と道教思想」高橋徹著)

これより前、敬福の娘明信は、桓武の重臣藤原南家継縄(つぐただ その後右大臣)に嫁し(760)ており、楠葉の別業にも来ていました。

この行幸を初め桓武は計13回交野ヶ原へ遊獵に出かけて、延暦6年(787)10月の遊獵では、継縄の別業に交野行宮も設け、その行宮において11月には継縄に率いられた百濟王氏が音楽を奏しました。(なお、継縄没後(796)、明信は、桓武の後宮に入り、お側近くで重職をつとめます。)

延暦4年(785)9月、桓武の信頼厚き重臣、一代の仕事師藤原種継(式家という。)が、遷都反対派に暗殺されます。その事件に、光仁の希望をいれ皇太子としていた実弟早良(さわら)親王も加わっており、ついに廃位とし、同年、淡路流罪(途中水食を絶って憤死するも、遺体はそのまま淡路で埋葬)としました。天智と天武の兄弟の皇位争いの結果、壬申の乱が生じた歴史を懸念した桓武が実子安殿(あて)親王を後継者にしたいという望みがあったことはいなめません。このやましい気持がのちに桓武を苦しめる早良の怨霊がらみの長岡京移転の理由のひとつです。

桓武は天智系としての皇位の正統性、安殿親王の皇太子任命の正当性を世間に宣言する奇策を実行します。それが交野ヶ原における中国風の郊天祭祀の実施です。中国の皇帝が都城の南にある円墳状の高まり(円丘)で天帝(北極星)と、自分が継いでいる王朝の初代皇帝を真夜中に祀る祭祀に倣ったものです。百済王氏の本拠に近く、親愛なる彼らが見守ってくれ、聖なる山を望み、頭上には天の中心である北極星が厳然と輝いている、舞台は最高の交野ヶ原です。桓武は天帝に加えて、初代皇帝の代わりに天智でもなく、父光仁(高紹 たかつぐ)を天神にあてました。光仁をもって新しい皇統が始まるという革命的な発想の企てでした。郊天祭祀は延暦4年(785)11月、続日本紀に「天神を交野の柏原に祀る。宿禰を賽す。」として行われ、また同6年(787)11月1日にも交野で行われ、重臣継縄を遣わしました。続日本紀に祭文も記され、いずれも冬至の日でした。この日桓武は交野行宮に滞在中であり、明信らと待機していたのです。(約70年後、文徳天皇が、もう一度、郊天祭祀を交野で行いますが、それからは一度もありません)この郊天祭祀が交野のどこで行われたのか。柏原の地はどこか。交野行宮に近い光仁を祀る楠葉、交野天神社の地であるとか、片鉾の杉ヶ本神社のあたり(かつて小さな土盛に一本杉があったそうです)、片埜神社あたりとかいわれますが痕跡はありません。旧枚方市史(昭和26年 1951)の旧小倉村の小字に柏原のついたいくつかの地名があります。地名は歴史を語るといいますがいかがなものでしょうか。

3. 坂上田村麻呂、交野ヶ原で阿弭流為らを斬る

奥州における俘囚の反乱と動乱状態に終止符をうつことは歴代天皇の懸案でした。桓武も即位後直ちに蝦夷の攻略に着手し、始め渡来系の百済王氏の一族が重用され敬福やその後継者、明信の弟俊哲や、その子教俊らが活躍しますが、やがて、同じく渡来系の坂上氏の威望大いにあらわれ、坂上田村麻呂ははじめ俊哲の副将となり、延暦16年(797)には征夷大將軍に任ぜられます。同20年(801)田村麻呂は征夷のうえ凱旋、ここに桓武の二大事業の平安京造都とならぶ、東北鎮撫が実現しました。

同21年(802)田村麻呂は、帰順し随従してきた蝦夷の2首長、阿弭流為、母礼の助命を乞いますが、公卿どもの浅知恵により斬首を命じられます。場所は河内の杜山(もりやま 植山、楢山ともいう。)とされます。桓武治世にとって交野は聖なる土地であり、征夷の天神への報告としてこの地を選んだか、それとも征夷事業の先達であった百済王氏一族への田村麻呂の感謝の表れでしょうか。延暦25年(806)3月17日、英傑桓武は崩じ京南紀伊郡柏原に葬られました。

夏季のため講座関連史跡見学会はありません

蓮如上人と出口光善寺・枚方寺内

第4回 枚方の歴史入門講座
講師 松中 喜一郎

日時 平成27年9月29日
場所 さだ生涯学習市民センター



はじめに

本日は、公私ご多忙のおり歴史入門講座にご参加頂きありがとうございます。本日のテーマは蓮如上人と出口光善寺・枚方寺内ということですが、まず京阪電車の駅で「寺」の名前がついている駅は京阪本線では2か所しかありません。光善寺と東福寺ですが、東福寺は行かれた方も多しご存知の方も多いと思います。

1. 蓮如上人と出口光善寺

今から540年前の文明7年{1475年}8月21日、浄土真宗中興の祖となった蓮如上人の一行が北陸布教の中心地であった福井越前の吉崎御坊を退去し、海路若狭の小浜に渡り、丹波から摂津を経て河内の国茨田郡中振の郷出口に落ち着かれた。時に蓮如上人61歳であった。

当時は1467年{応仁元年}に応仁の乱が起こり、北陸地方でも加賀石川県の守護富樫政親らと本願寺門徒の抗争が起こり、本願寺側は反幕府とされ北陸拠点であった吉崎御坊が攻撃の危機にさらされていた。この危険を避けるため蓮如の長男順如{初代光善寺住職}が吉崎に赴き、蓮如上人一行の退去と出口への移動にあたった。

その頃以前より蓮如上人の教えに深く帰依していた御厨石見入道光善が喜んで蓮如上人を出口草庵に迎えた。{寺名：光善寺の起源出口の草坊について詳細具体的なことは不明であるが、その所在地は{茨田郡中振郷出口村中三番}といい、また{茨田郡中振郷山本之内出口の村中の番}ともいわれている。

当時の出口には二丁四方{約14400坪：約48000㎡}の大きな池があり「水辺深きあしわらの中」とあるように葦の生い茂る低湿地に盛り土をして坊舎を建てられた。それで池を埋め立てて諸堂を建立されたので山号は[淵埋山：えんまいさん]と名付けられた。

その池は今も小さく残され石川丈山作の光善寺庭園の一部となっている。また、池

の周辺には「梓の木」{現在の植物名；さいかち}がよく茂っていたので、人々は光善寺のことを「梓原堂（しんげんどう）」とも呼んでいた。

今も庭園の片隅にさいかちの木があり、大阪府の天然記念物に指定されている。当時は淀川が庭園のすぐ西側を流れていたが、庭を望む書院からは三十石船の上り下りの風景が見えたという。その後淀川は500m以上も西へ移り、風景も全く変わってしまった。江戸時代数々の名園を手掛けた漢詩人・書家としても有名な石川丈山（1583年～1672年）が光善寺に1年ばかり逗留して書院の庭を完成したといわれている。その折、丈山はこの書院を「萬象亭：ばんしょうてい」と名付けており、今もその扁額が残されている。

光善寺本堂は天文3年（1534年）に火災に遭い、一時は淀川の向こう側摂津の国鳥飼や河内の国茨田郡大場等に移転したが、現在の本堂は寛永14年（1637年）約380年前の建築で間口11間奥行8間の大きさである。最盛期は10指に余る末寺もあったというが今は境内も3000坪ばかりの敷地に縮小された。

昭和初期までは大阪市内の檀家や「蓮信講」の門徒らの参詣も多く、その報恩講の時など門前に出店が出て大変賑わっていた。なお、蓮如上人の出口時代「御文」には「九間在家」という言葉があり、当時の出口はわずか9戸しかない村であった。蓮如上人はこの出口の人々にも親しく仏法を説かれた。

→「蓮如上人腰掛け石」→出口だんご ←石だんご

「教行信証」：浄土真宗の根本聖典である親鸞聖人の主著。全6巻（教・行・信・証・真仏土・化身土）

※ {顕浄土真実教行証文類} のこと。

「御文」：御文は、浄土真宗本願寺八世蓮如上人が、その布教手段として全国の門徒へ消息（手紙）として発信した仮名書きによる法語。200通以上あり。

・本願寺派では「御文章」；ごぶんしょう

・大谷派では「御文」；おふみ

・興正派では「御勸章」；ごかんしょう という。

「白骨の御文」：無常の哀感ただよう中世仮名法語の中でも名文中の名文といわれる。蓮如上人が光善寺で書かれたと言われている。

2. 枚方寺内

戦国期に成立した地内町の特徴は、都市を圍繞する土塁や堀（防御施設：寺内町における自治の繁栄）がある。主に真宗寺院を中心に形成された自治都市、集落全体が寺院の境内ともいえる。大阪府では富田林、貝塚、八尾等にあった。大阪そのものが、今の大阪城あたりにあった石山本願寺の寺内町として形作られていった。

出口寺内町は、越前吉崎を退去した蓮如上人が出口に御坊を構えたことをその始まりとされる。出口では明確な防御施設が確認出来ていない。また他の寺内町に比べ町割が整然としていない。また出口は困郭がない周囲を囲む土塁や堀がない寺内町である。寺内町は招堤や枚方にもあった。出口集落は西に淀川、東に香里丘陵がある平野部であり、周囲を囲う堀や土塁は確認出来ていない。

枚方の町は、寺内町が源流といわれている。招提の語源は梵語で寺院を意味する。枚方寺内町は蓮如上人の息子実如が建てた順興寺(今の願生坊)を中心に発展した。油屋や味噌屋、鋳物屋などが集まって栄えたが織田信長の焼き討ちで焼失した。

参考資料 「蓮如上人と光善寺」「枚方市史」「枚方宿の今昔」「枚方市史年報第13号」「枚方市の社寺建築」

講座関連史跡見学会訪問地（光善寺）



光善寺山門



道標

大正11年11月に建立された道標。光善寺駅から国道1号下の地下道を上がった先にあります。



蓮如上人木像



本堂

東海道は57次・枚方宿は56番目の宿場町だった 枚方宿の設置と三十石船

第5回 枚方の歴史入門講座
講師 上谷 勝己

日時 平成27年10月20日
場所 枚方市市民会館



1. 東海道宿駅伝馬制・完成までの歴史

今川義元 (1519～1560年)
織田信長 (1534～1582年) 従一位・太政大臣
豊臣秀吉 (1537～1598年) 従一位・関白 太政大臣
徳川家康 (1543～1616年) 従一位・太政大臣 (1603～1605年)
徳川秀忠 (1579～1632年) 従一位・太政大臣 (1605～1623年)
徳川家光 (1604～1651年) 従一位・左大臣 (1623～1651年)

2. 律令時代九州から東北地方まで「五畿七道」の行政区域にわけて統治

五畿とは摂津・河内・和泉・山城・大和
七道とは東海道(中)・東山道(中)・北陸道(小)・山陰道(小)・山陽道(大)・
南海道(小)・西海道(小) *街道ではなく行政範囲
宿駅には馬を20匹(大路)・10匹(中路)・5匹(小路)

3. 戦国時代

今川義元は「一里拾銭」、織田信長は関所撤廃・並木整備、豊臣秀吉は関所廃止・
一里塚設置・宿駅への人馬手配 *各領内で管理

4. 家康が始めた「東海道宿駅伝馬制」 *東海道は57次だった

1600年9月15日関ヶ原の戦いに勝利後、ただちに街道調査を命じ、
1601年正月江戸と京を結ぶ新しい東海道を定め、約40か所の宿駅を選定。
岡部宿(不明) 大津宿(1602年) 守口宿(1616年) 箱根宿(1618年)
川崎宿(1623年) 庄野宿(1624年) など
1602年6月「路次中駄賃之覚」下付
1604年一里塚設置
「伝馬朱印状」と「伝馬定書」(御伝馬之定、伝馬之定) 下付

宿駅には人足 36 人と伝馬 36 疋を常備、次の宿駅までの送客を義務付けた、いわゆる「東海道宿駅伝馬制」

朝廷との関係を重視し、江戸と京を結ぶ東海道としたのは、大坂城に君臨する豊臣秀頼と淀君に關与させたくない思惑からか

宿駅毎に人足も馬も交代「人馬継立」、宿駅が責任を持って行う業務「宿次」

この任にあたる馬を「伝馬」、人足も「伝馬人足」と呼び制度の中心

宿駅が連携して行う街道輸送制度を「宿駅伝馬制」と呼ぶ

1614 年 大坂冬の陣

1615 年 大坂夏の陣・豊臣家滅亡

5. 家康・秀忠に東海道大坂延長を指示

逢坂關跡を越えて髭茶屋追分から左に向かう伏見街道を「大坂への東海道」

伏見・淀・枚方・守口の 4 宿を元和年間初期（1615～1624）には設置

1594 年豊臣秀吉が整備した文祿堤（京街道・大坂街道）を東海道に編入

1619 年大坂城代設置

秀忠は五街道（東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中）の他に日光例幣使道・美濃路・本坂道等の脇往還も直接管理

6. 家光・秀忠より引継ぐ（1623 年）

1624 年東海道最後の宿駅「庄野宿」設置、江戸～京は 53 宿・53 継立、江戸～大坂は 57 宿・57 継立、三代将軍による「東海道宿駅伝馬制」完成

1629 年大坂城完成

1635 年武家諸法度による参勤交代制が規定

1659 年道中奉行発令

宿内管理・並木・一里塚・橋の架け替えを指導

因みに中山道 67 宿・67 継立は（1602～1694 年）五代目将軍・綱吉迄かかる宿駅人馬数（基本）

東海道は 100 人 100 疋

中山道は 50 人 50 疋

甲州・日光・奥州道中は 25 人 25 疋

7. 古文書が伝える大坂までの「57 継立」

1674 年 5 月 代官文書 五街道宿・宿拝借錢覚 P024

1686 年 12 月 東海道中取締令 P025

1711～16 年 江戸大伝馬町の書簡 P025

1744 年 継飛脚御停止之事 P026

1758 年 道中奉行所回答 P026

1789 年 幕府大目付の回答文書 P027

1805 年 道中奉行所宛の文書 P027

1806 年 東海道分間延絵図 P027

1825 年 東海道取締書物類寄 貳拾五之帳 五街道張出書付之部 P029

1843 年 東海道宿村大概帳 P030

1797 年 1841 年 枚方宿の帳簿類 P031～035

8. 「三十石船」と「くらわんか舟」

- ① 淀川の源流は琵琶湖に発し、大阪湾・瀬戸内海に注ぎます。
川幅約 700m、総延長約 75 km、流域面積約 8,240 平方キロメートルです。
支流・支川は 965 本と日本一です。
古代より政治、文化、経済の大動脈でした。
- ② 古代淀川交通の中心は山崎でしたが、平安時代以降は淀となりました。
石清水八幡宮の支配に属し、流通、交通の役務を果たしました。
巨椋池のある淀に根拠を持つ淀船が一手に支配していました。
活躍したのは淀二十石船でした。
豊臣秀吉が天下統一後、天正年間に淀川流域での独占権が公認されました。
淀在住の河村、木村の両家の支配とされました。
しかし同時期、海船持ちであった者について、小田原攻めの功績により、
三十石船以上の大船を淀川で運行することが認められました。
淀船との並存状態となり、双方とも過書船として公役に従事しました。
- ③ 江戸時代になり三十石船は
慶長 8 年（1603）徳川家康は過書船の制を定め、過書座に対し朱印状を下付、
淀在住の河村与三右衛門、木村宗右衛門を過書奉行としました。
淀船、三十石以上の大船を併せて過書座が支配する体制が整えられました。
淀船を除く過書船は銀子 200 枚を公用として運上することになりました。
元和元年（1615）大坂夏の陣の時、淀船は大いに徳川家のために活動し、引
き続き運上を免除、三十石以上の船は銀子 400 枚に引き上げられました。
同年、河村与三右衛門が死去していた後任に、京都の角倉与一が任命され、
家領として三十石以上の過書船から上米（じょうまい）を徴収、上米は上米銀
ともいい、下り運賃の 2 割を過書座が徴収しました。
はじめ、上りは徴収しなかったが、後に上り下りとも徴収、実際には米ではな
く、銀又は銭を船番所で徴収しました。
寛永 3 年（1626）船賃、上米についてのお定めが下付、過書船の淀船が衰退し
ていきました。（規定がなく、運上金免除、上米無しが逆に悪条件に）寛文 13
年（1673）淀船の船頭が不法に抑留される妨害を受け運航は苦境に、過書奉行
は三十石以上の大船持ち主側に立つようになりました。
元禄 11 年（1698）伏見の経済復興のため、運上銀 1200 枚を納めることを条件
に、十五石船 200 艘の伏見船が許可されました。
伏見船は過書奉行の管轄外で、伏見奉行が管轄し、貨物運送や大坂・伏見間な
どの貨客運送も含まれていました。その後、伏見船の大型化が進み、過書船、
淀船に甚大な影響が及びました。
淀船は深刻な打撃を受け、過書船側の猛烈な反対運動が効果を納めました。
宝永 7 年（1710）伏見船停止の決定がなされました。
伏見船停止は大打撃となり、町に失業者があふれ、経済は活況を失いました。
享保 7 年（1722）町の要望を受け、再び伏見船を許可しました。
同年、京都町奉行所などの幕府幹部の連名で淀船を過書船に編入が命じられ、
船の運賃が決められ、上米も過書船同様に定められました。
船の長短も決められ、三十石積みは、長さ 5 丈 6 尺（約 17m）、幅 8 尺 3 寸（約
2m50cm）とされました。
新船は役人立会いで積載量を検査し、「過」の刻印を打つことになりました。
以後 150 年間、明治にいたるまで淀川筋において、過書船と伏見船が並行して

運行されることになりました。過書船は過書奉行、伏見船は伏見奉行に代わり、伏見船取締まりが置かれ支配しました。

枚方の浜、泥町村に伏見船番所と過書船番所があるのはこのためです。

過書船番所は2畝15歩(約75坪)、伏見船番所は1畝3歩(約33坪)でした。

何れも木南家からの借地でした。両番所前には船着き場があり、それぞれ幅3間(約5.4m)と2間(約3.6m)の石段で川に降りるようになっていました。

享保9年(1724)過書船番所前に船高札が立てられ、船賃が記載されました。高札は横7尺5寸2分(約2.3m)縦2尺6寸(約78cm)でした。

天明7年(1787)過書船総数は740艘、伏見船総数は200艘でした。

慶応2年(1866)過書船の船種は旅客専用の早登人乗三十石船119隻、天童(てんと)船が379隻、その他57隻、青物船25隻、手繰今井船24隻など合わせて1384隻であり、高槻柱本、枚方を根拠にする煮売茶船が12隻あったとされています。

稼働船が減少した理由は貨物量に対して船数が過剰、屎船の台頭、闇で大規模に物資を輸送、荷寄屋の出現等でした。

三十石船は過書船、伏見船ともにあり、旅客の運送が主で、喫水が浅く荷物船よりもスピードがありました。

1日2回、昼船、夜船で伏見、大坂八軒屋を往復しました。

下りは半日、又は半夜、上りは1日、又は1晩を要しました。

水夫(かこ)は4人、客の定員は28人で便所の設備はありませんでした。

乗合で極めて狭く、窮屈でしたが、金を払えば何人分かのスペースを「仕切り」で確保出来ました。屋形ではなく、苫を掛けて雨露を凌ぎました。

昇りは沿岸に綱引き道をつけ、綱引き人足が船の中央部の柱にくくった綱を引いて遡行しました。綱引き道は淀川右岸7カ所、左岸2カ所ありました。

枚方地域では出口の松ヶ鼻から枚方までの約20丁(約2km)を引き、船番所の前で対岸大塚に渡り、高槻大塚から前島まで右岸を引き、前島で左岸に渡り、橋本まで引きました。

安政2年(1855)清河八郎の日記「西遊草」によれば、運賃は下り84文(約1,680円)、中途からの乗船は100文(約2,000円)で高くなっていました。

上りは180文(約3,600円)、中途からの乗船も同じでした。*1文=20円

ふとん1畳の借賃は上り18文(360円)、下り24文(480円)でした。

三十石船は伏見と大坂のほぼ中間になる枚方浜に停泊しました。

④ くらわんか舟は

三十石船や荷物船などに漕ぎ寄せ、船べりに鏈様のものをかけて、飲食を船客に売った小船が煮売茶船で、煮売船、茶船とも呼ばれました。

淀川の茶船は近世以前から存在したようですが、幕府公認になってから茶船商売を独占しました。「餅くらわんか。酒くらわんか」と荒々しく売りつけたので「くらわんか舟」と称されるようになりました。

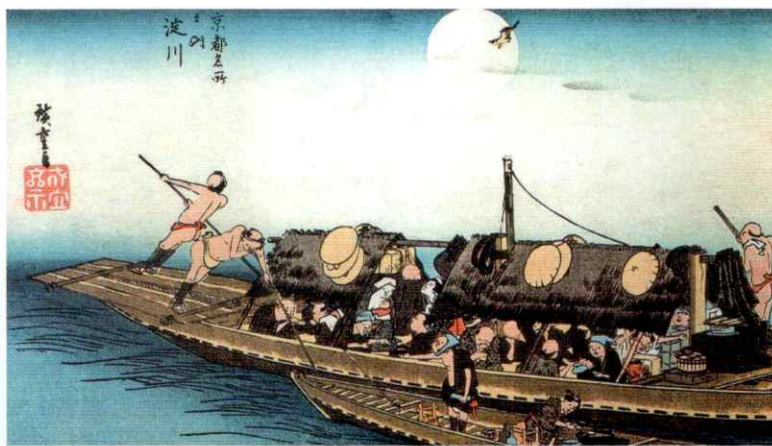
由縁は大坂夏の陣で徳川家のために、高槻城から兵糧米2万石を運んだご褒美の天下御免の特権であると言われています。

淀川における茶船の発生は摂津の国・柱本の20艘です。当初は商売の傍ら船番所の公用を果たす為、柱本の茶船が枚方にやって来ました。

寛永12年(1635)柱本の亀屋源三郎が枚方へ引っ越して来て、煮売り商売を始め、公用も果たしました。

同年 枚方の五兵衛が天の川洪水の時、公用の飛脚を渡した功績により、過書

座から茶船1艘の許可を受け、枚方の茶船として始めました。
 元禄12年(1699)伏見船の茶船も許可され、あわせて6艘になりました。
 宝永7年(1711)伏見船停止後は、過書船の枚方茶船は源三郎、五兵衛、八兵衛、新七、治兵衛、九兵衛の6艘となりました。
 伏見船の再許可後、伏見船茶船3艘が加わり、合わせて9艘が枚方での許可船となり、枚方船番所の公用、幕府・朝廷の公用、朝鮮通信使来朝の公用等を果たしました。
 運上金は免除されていましたが、義務として水上の警備活動、溺死人の処理、船番所役人の輸送、文書の配送等の公務を行いました。そのため船は逆櫓の備えがあり、普段から後ろ向きに進み、緊急時に発進することになっていたそうですが…、絵(下図参照)ではそのような備えもなく、船のつなぎ方も前向きです。



京都名所之内 淀川
 歌川広重(安藤広重)
 が天保5年(1834年)
 頃に描いた浮世絵。

安永年間(1772~)枚方浜の餅屋が三十石船の中に入り込んで無許可で船内販売をするようになり、許可船と大問題となり、大部分は中止するが、鍵屋太兵衛等は止めませんでした。

取り調べの時「60年前から街道裏で煮売り商売をしている」ので其の実績を認めてほしいと訴えています。

三十石船は最盛期には270艘を越え、毎日約8~9,000人を運んでいました。明治元年(1868)記録では平均50艘が、約1,500人の旅客を運んでいました。明治2年(1869)過書船の茶船の状況は、ひらかたの株数6隻、柱本3隻となり、枚方の茶船の比率が高くなっていました。隻数は株数の事で船の数はこれより多かったようです。

明治3~4年(1870~1871)淀川汽船設立

大阪道修町の商人が資本金10万円で天満橋・伏見間の定期航路を開設
 小型蒸気船(川蒸気)で鳩丸・水龍丸と命名、2隻とも外輪船

明治10年(1877)大阪~京都・汽車(陸蒸気)開通

明治43年(1910)天満橋~五條・京阪電気鉄道開通

昭和5年(1930)枚方~高槻・枚方大橋開通

昭和39年(1964)東京~新大阪・東海道新幹線開通

参考文献 東海道57次

志田 威 箸

三十石船とくらかわんか舟

堀家啓男 箸

淀川の三十石船

山路茂則 箸

旅行記 西遊草

清河八郎

講座関連史跡見学会訪問地



宿場町を考える会30年の歩み（行事一覧） 敬称略

開催日	行 事	参加者
昭和60年 (1985)	3月21日 結成大会開催(浄念寺) 初代会長 大塚日出男 選出 会名、会則、役員などを決定	76
	5月19日 見学会 枚方宿 (木南家、鍵屋ほか)	122
	8月23日 宿場町枚方とくらかわんか展開催 (枚方近鉄) ～26日 民具、古文書など800点展示	3850
	10月6日 見学会 枚方宿 (願生坊、台鏡寺ほか)	60
	11月10日 わらじ作り講習会	52
	11月17日 わらじ履き京街道見て歩き (橋本～かささぎ橋)	122
昭和61年 (1986)	3月2日 見学会 意賀美神社	40
	3月31日 第2回総会 講演会 (枚方宿)	43
	5月5日 講演会 (高塚造り) 見学会 (氷室の里探訪)	94
	6月15日 講演会 (蓮如上人) 見学会 (蹉跎地区)	40
	9月7日 小冊子「河内西国33所観音めぐり」完成披露会 文 大塚日出男、絵 塚田憲一	67
	11月3日 見学会 (守口宿)	50
昭和62年 (1987)	1月9日 講演会 (酒づくり) 見学会 (津田の里めぐり)	38
	3月29日 第3回総会 講演会 (枚方の中世城郭)	44
	5月5日 講演会 (蓮如の偉業) 見学会 (敬応寺など)	50
	7月5日 講演会 (琵琶湖と淀川) 見学会 (大津宿など)	53
	8月29日 記念講演会 (枚方まつり協賛) ～30日 (宿場町枚方の繁栄) (幕末枚方の民衆の動き)	24
	10月15日 精進料理賞味会 (逢坂月心寺)	51
	11月3日 見学会 (高槻城跡と神峰山寺など)	51
昭和63年 (1988)	1月10日 初釜お茶会 (意賀美神社) 会誌「宿場町ひらかた」創刊	55
	4月10日 第4回総会 見学会 (長尾正俊寺など)	56
	5月5日 見学会 (安土城址など)	56
	6月20日 意賀美神社「百度石」建立寄付	
	7月10日 講演会 (交野のむかしむかし)	55
	8月23日 「京街道と枚方」展 (枚方三越) ～28日	3900
	9月23日 見学会 (茨木方面 郡山椿本陣など)	82
	11月6日 講演会 (鍵屋女将の話) 見学会 (枚方宿)	76
平成元年 (1989)	1月16日 見学会 (八幡市松花堂など)	72
	3月21日 第5回総会 見学会 (大垣内 三松邸跡)	58
	5月28日 見学会 (伏見寺田屋など)	74
	6月1日 テレホンサービス開始 (枚方の伝説史実紹介)	
	7月23日 講演会 (御殿山美術センター) 見学会 (渚の院跡)	57
	9月25日 山口家住宅保存要望の回答	

次頁へ続く

開催日	行 事	参加者
平成元年 (1989)	10月1日 京街道わらじ旅(北河内府民センター共催) 枚方宿～守口佐太天満宮	550
	11月23日 見学会(土山宿、関宿)	120
平成2年 (1990)	1月28日 見学会(宇治万福寺)	75
	3月25日 第6回総会 見学会(御殿山 白雲寺)	53
	5月27日 見学会(富田林寺内町)	80
	8月5日 講演会(うだつ)	50
	11月23日 見学会(唐招提寺、今井町)	103
平成3年 (1991)	1月15日 見学会(一之宮片埜神社)	71
	2月 枚方市長へ要望書提出(郷土資料館建設など)	
	3月31日 第7回総会 第2代会長 神野忠雄 選出 講演会(磯島) 見学会(枚方宿西半分)	51
	5月31日 テレホンサービス終了	
	6月16日 見学会(宝塚小浜宿など)	55
	7月21日 記念講演会(蕪村の俳句と枚方)	60
	8月 大塩市長候補に質問状提出 枚方宿見学案内図作成(2000部) 宿場町枚方とくらわんか 復刻版発行(1000部) 旧宿場町当時の町家の説明板設置(3カ所)	
	9月16日 復刻版出版記念会 講演会(茶船鑑札とくらわんか船) 臨時総会(補正予算)	72
	11月13日 大塩新市長との懇談会(要望書回答)	
	11月17日 見学会(茨木隠れキリシタンの里など)	51
12月 「旧京街道磯島茶屋町」道標建立		
平成4年 (1992)	2月11日 講演会(わが郷土よど) 見学会(淀城跡など)	72
	3月7日 社会教育部との懇談会	
	4月5日 第8回総会 枚方市への寄付予算50万円計上 講演会(枚方市文化財の現状)	53
	5月17日 見学会(大阪城、大阪市立博物館)	49
	7月19日 講演会(木津川と淀川治水の歴史)	35
	8月20日～24日 「枚方宿と町衆」展開催(ピオルネ)	3000
	10月25日 見学会(水口宿、忍者屋敷など)	54
平成5年 (1993)	1月9日 見学会(北浜、道修街など)	45
	1月22日 枚方市長へ要望書を提出 文化財保護条例、村野高札場の修復	
	4月4日 第9回総会 鋳物師はんべい観賞	62
	6月12日 見学会(大宇陀町、室生寺など)	58
	9月28日 講演会(レオナルドとミケランジェロ2人の不和)	54
	11月13日 見学会(近江八幡、安土城博物館など)	55

開催日	行事	参加者	
平成6年 (1994)	1月30日	新年懇親会 講演会 (郷土の歴史)	60
	3月27日	第10回総会 見学会 (淀川資料館)	40
	6月	「枚方宿の今昔」発刊に着手	
	6月19日	見学会 (貝塚方面)	58
	8月26日	講演会 (北河内の歴史と先駆者片山長三先生)	72
	11月6日	見学会 (飛鳥博物館など)	52
	11月27日	地域づくり団体協議会に加盟 (大阪府から推薦4団体)	
平成7年 (1995)	1月14日	新年懇親会 講演会 (平安貴族と交野ヶ原) (江戸時代の旅と枚方宿)	58
	3月26日	第11回総会 第3代会長 福谷一男 選出 講演会 (枚方宿と台鏡寺)	58
	6月18日	見学会 (平野郷など)	56
	7月7日	中司市長との意見交換会 (文化財行政の抱負など)	
	8月26日	講演会 (大阪弁よもやま話)	72
	10月14日	見学会 (飛鳥路など)	40
	11月20日	大阪府から地域文化事業奨励賞	
平成8年 (1996)	1月21日	新年懇親会 講演会 (近世宿駅制度)	45
	3月15日	自治大臣から地域づくり団体表彰	
	3月24日	第12回総会 講演会 (大正10年郷社昇格願) 見学会 (意賀美神社参集殿)	48
	6月8日	見学会 (草津宿)	50
	8月24日	講演会 (身近な歴史を考える)	53
	10月20日	見学会 (大山崎、島本方面)	40
	平成9年 (1997)	1月19日	新年研修会 講演会 (枚方宿の今昔の取り組み) (紀州侯の参勤交代)
4月27日		第13回総会 講演会 (願生坊について) 10周年記念誌「枚方宿の今昔」発刊 3000部印刷 頒布価格2000円	55
8月1日		枚方市から優良団体表彰	
6月29日		見学会 (自治都市堺方面)	54
8月30日		講演会 (鉢かつぎ姫)	42
10月26日		見学会 (大和路など)	40
平成10年 (1998)		1月25日	新年研修会 講演会 (くらわんか茶碗の故郷)
	3月29日	第14回総会 第4代会長 田中 彰 選出 講演会 (枚方宿と鍵屋)	47
	6月	「枚方宿の今昔」2000部増刷	
	6月28日	見学会 (丹波篠山など)	57
	8月30日	講演会 (戦国武将と交野・枚方)	61
	11月29日	見学会 (淡路洲本方面)	47

開催日	行事	参加者	
平成11年 (1999)	1月24日	新年研修会(渚院の碑文を読む)	54
	2月	枚方市長への要請(郷土の歴史案内標識の設置)	
	3月28日	第15回総会 見学会(淀川資料館)	47
	6月27日	見学会(和歌山名手宿本陣など)	53
	8月29日	講演会(片町線を通して見る近代)	50
	11月27日	見学会(奈良 平城宮など)	40
平成12年 (2000)	1月23日	新年研修会(東海道枚方宿) 見学会(塩熊商店)	65
	3月26日	第16回総会 見学会(意賀美神社境内散策)	26
	6月25日	見学会(岸和田方面)	45
	8月27日	講演会(交野ことばの語源をさぐる)	45
平成13年 (2001)	4月17日	第17回総会 第5代会長 米谷三男 選出 見学会(枚方宿散策)	30
	6月24日	見学会(椿本陣郡山宿など)	43
	8月26日	講演会(伊賀の歴史)	50
	12月2日	見学会(鴻池、門真三ツ島、守口中西家など)	38
平成14年 (2002)	1月27日	新年研修会(鍵屋と淀川・枚方宿) 見学会(鍵屋)	59
	3月31日	第18回総会 見学会(一乗寺)	40
	6月30日	見学会(伊賀上野方面)	33
	10月1日	枚方市長への要望書提出(淀川舟運の整備について)	
	12月1日	見学会(兵庫龍野方面)	34
平成15年 (2003)	1月26日	新年郷土歴史研修会(四国遍路の歴史)	33
	3月29日	第19回総会 講演会(世界水フォーラム)	24
	6月29日	見学会(赤穂方面)	36
	8月31日	講演会(日本語の語源・ルーツについて)	34
	11月23日	見学会(奈良 柳生の里など)	48
平成16年 (2004)	1月25日	新年懇親会 講演会(枚方と百済王氏について)	34
	3月30日	第20回総会 講演会(アテルイ)	25
	5月19日	見学会(美山かやぶきの里など)	36
	8月28日	講演会(戦乱期の交野)	25
	11月19日	見学会(須磨方面)	29
平成17年 (2005)	1月25日	新年懇親会 講演会(枚方と百済)	31
	3月27日	第21回総会 講演会(継体の謎)	40
	6月4日	見学会(桑名方面)	35
	8月31日	講演会(県神社とその祭事と由来)	45
	11月26日	見学会(若狭方面)	40
平成18年 (2006)	1月29日	新年懇親会 講演会(戊辰箱根戦争に巻き込まれた 沼津藩の苦悩)	28
	3月26日	第22回総会 講演会(発見された元意賀美神社の絵馬)	40
	5月30日	見学会(大和五條方面)	36
	8月21日	枚方市長へ要望書を提出(一里塚説明板設置など)	

開催日	行事	参加者	
平成18年 (2006)	10月28日	講演会(近世北河内地方の教育「私塾南明堂」)	35
	11月28日	見学会(醒ヶ井宿、柏原宿など)	33
	12月5日	対市要望書の回答と再度、要望書提出	
平成19年 (2007)	1月29日	新年懇親会 講演会(枚方浜の朝鮮通信使ご馳走役について)	30
	3月25日	第23回総会 第6代会長 堀家啓男 選出 講演会(枚方宿設置以前の枚方)	30
	5月23日	見学会(土山宿、関宿)	37
	9月1日	講演会(桓武天皇出現への道のり)	40
	11月17日	講演会(東海道枚方宿)	20
	11月24日	わらじを履いて枚方宿を散策	13
	12月4日	見学会(泉南、和歌山方面)	37
平成20年 (2008)	1月20日	新年懇親会 講演会(桜散る交野 星降る天川)	24
	3月23日	第24回総会 講演会(枚方寺内と枚方宿)	32
	5月28日	見学会(滋賀 草津宿など)	36
	9月6日	講演会(都山流尺八創始者 中尾都山と枚方)	28
	10月29日	講演会(枚方宿の高札場) 見学会(村野高札場)	24
	11月25日	見学会(宮宿、鳴海宿など)	34
	12月6日	講演会(楠葉にもあった本陣紀州藩小休本陣米谷家)	34
平成21年 (2009)	1月25日	新年懇親会 講演会(三十石舟唄を歌う)	26
	3月22日	第25回総会 講演会(楠葉台場と樟葉宮)	26
	4月23日	枚方市長へ要望書(明治18年洪水碑の説明板設置など)	
	9月6日	講演会(北河内周辺の歴史) 見学会(四條畷市立歴史民俗資料館)	20
	10月9日	国土交通省淀川河川事務所へ要望書を提出 明治18年洪水碑の移設について	
	10月22日	見学会(郡山宿椿本陣)	22
	11月18日	見学会(郡上八幡など)	38
平成22年 (2010)	12月6日	講演会(物部氏と伊加賀の地名について)	45
	1月24日	新年懇親会 講演会(紀州藩主の参勤交代)	24
	3月28日	第26回総会 会則の一部改正(本会の目的) 講演会(牧、交野一揆の解体と織田政権)	29
	5月26日	見学会(太子町、龍野方面)	31
	6月27日	見学会(枚方公園周辺)	43
	9月5日	創立25周年記念講演会(枚方の百済王氏)	187
	10月19日	見学会(旧淀宿、淀城址など)	53
平成23年 (2011)	11月24日	見学会(丹波篠山、柏原方面)	42
	1月23日	新年懇親会 講演会(江戸時代、天野川の往還筋に橋はあったか)	25
	2月23日	見学会(平野郷、太子町、竹内街道など)	38
	3月27日	第27回総会 講演会(享保期の新田開発と出口寺内町)	21

開催日	行事	参加者	
平成23年 (2011)	4月27日	見学会(高槻城址、芥川宿など)	19
	5月25日	見学会(大和郡山、今井町など)	34
	7月4日	枚方市長へ要望書提出(東海道交流会館の設置)	
	9月19日	講演会(そうなんだ!枚方宿あれこれ)	100
	10月12日	見学会(守口宿など)	15
	11月24日	見学会(熊川宿、朽木宿など)	46
	12月10日	講演会(紀州候参勤交代と紀州家家老専用本陣中島家)	36
	12月20日	枚方市長へ要望書を再提出 (東海道交流会館の設置)	
平成24年 (2012)	1月22日	新年懇親会 講演会(大塩の乱こぼれ話)	24
	3月25日	第28回総会 講演会(枚方宿発掘調査から)	30
	4月4日	見学会(御殿山、百済寺跡など)	35
	5月17日	見学会(室津、坂越など)	43
	6月6日	見学会(八幡市、橋本方面)	53
	9月25日	見学会(八幡市、東高野街道方面)	44
	10月21日	講演会(交野ヶ原に繰り広げられた歴史)	125
	11月10日	東海道宿駅会議への支援 講演会(枚方宿こぼれ話)	
	11月28日	見学会(観心寺、富田林寺内町など)	40
	12月2日	講演会(東海道枚方宿 淀川との関わり)	38
平成25年 (2013)	1月27日	新年懇親会 講演会(続・大塩の乱こぼれ話)	24
	3月24日	第29回総会 講演会(淀川環境と治水の歴史)	28
	4月3日	見学会(長尾、藤阪など)	38
	5月15日	見学会(商都 堺方面)	30
	6月1日	見学会(枚方宿)	31
	9月29日	見学会(大山崎、高槻方面)	43
	11月3日	講演会(大名行列と枚方)	102
	11月27日	見学会(美山かやぶきの里、上賀茂神社社家町)	34
12月7日	講演会(行基と枚方)	48	
平成26年 (2014)	1月26日	新年懇親会 講演会(十干・十二支)	34
	3月23日	第30回総会 講演会(枚方宿発掘調査から2)	29
	4月5日	見学会(万年寺山周辺)	23
	6月1日	見学会(出石、福知山城など)	45
	9月26日	見学会(伏見宿)	34
	10月19日	講演会(古代淀川の水運と継体大王)	143
	10月23日	見学会(鷹塚山碑)	31
	11月19日	講演会(初代枚方大橋の架橋)	60
	11月27日	見学会(奈良 五條方面)	42

開催日	行事	参加者		
平成 27 年 (2015)	1 月 18 日	新年懇親会 講演会 (ある山村をのぞき窓として見える中世社会)	27	
	2 月 16 日	枚方市長へ要望書を提出 (鷹塚山碑の移設)		
	3 月 22 日	第 3 1 回総会 講演会 (水と向き合ってきた門真の先人たち)	36	
	4 月 9 日	見学会 (牧野周辺)	25	
	6 月 3 日	見学会 (大津坂本、京都嵯峨鳥居本など)	39	
	7 月 25 日	講演会 (継体大王をめぐる研究の現状と課題)	131	
	6 月 16 日	創立 30 周年 記念事業 枚方の歴史 入門講座	記紀に見る茨田堤築造など	103
	7 月 21 日		枚方での行基の活躍	102
	8 月 18 日		桓武天皇と郊祀壇	95
	9 月 29 日		蓮如上人と出口光善寺	84
	10 月 20 日		枚方宿の設置と三十石船	88
	10 月 28 日		浄念寺拝観と懇親会	20
	11 月 15 日	創立 30 周年記念式典 記念講演会 (近世の枚方宿をめぐる一様相) (考古学から見た古代の淀川水運) (継体天皇と古代の淀川水運)	230	
12 月 1 日	見学会 (奈良 喜光寺、奈良町)	31		
平成 28 年 (2016)	1 月 17 日	新年懇親会 講演会 (戊辰箱根戦争)	24	

役員推移

(敬称略)

年/月	役員					会員数
	会長	副会長	事務局長	広報	財務	
60/3	大塚日出男				初田 節子 澤田 洋子	76
61/3						
62/3						
63/3						
元/3	神野 忠雄	初田 節子 坂本 治郎 寺島 正計	中島 三佳	寺島 正計	澤田 洋子 堀家 啓男	178
2/3						180
3/3						178
4/3						161
5/3	福谷 一男	初田 節子 寺島 正計 福谷 一男	中島 三佳	寺島 正計	堀家 啓男 千葉 栄子 堀家 啓男 北田 節子	187
6/3						185
7/3						164
8/3						169
9/3	田中 彰	初田 節子 寺島 正計 田中 彰	中島 三佳	寺島 正計	北田 節子	166
10/3						157
11/3						137
12/3						142
13/3	米谷 三男	安廣 義見 澤田 洋子 多田恵美子	中島 三佳	寺島 正計 中島 三佳	北田 節子	135
14/3						
15/3						
16/3						92
17/3	堀家 啓男	安廣 義見 多田恵美子	この期間 事務局長廃止	安廣 義見	中川ゆり子 千葉 栄子 北田 節子	86
18/3						76
19/3						83
20/3						80
21/3	堀家 啓男	安廣 義見 多田恵美子 松中喜一郎	この期間 事務局長廃止	安廣 義見	村次 信子	98
22/3						97
23/3		多田恵美子 上谷 勝己	上野 幸夫	石川 勲	村次 信子 出羽 雪子	96
24/3						85
25/3		上谷 勝己 村次 信子	上野 幸夫	石川 勲	村次 信子 出羽 雪子 奥谷 佳子	86
26/3						92
27/3						

(注) この表は過去の資料をもとに作成しましたが、推定部分もあります。